

# 現代宗教の変容——「草創期GLA」を事例として——

渡 邊 典 子

## 1 はじめに——制度化と教説と神秘＝呪術的实践をめぐる宗教変容

本稿は、「宗教法人GLA」（以後、GLAと記す）について、制度化、教説、神秘＝呪術的实践をめぐる宗教変容を明らかにするものである。ここでは、1969年4月から1976年6月25日までの「草創期のGLA」を対象として、初代教祖である高橋信次（以後、信次と記す）の教団の歴史・行・教説・組織を検討することで、この宗教の性格の変容をとらえたい。本稿は、とくにマックス・ヴェーバーの「神の容器」と「神の道具」という宗教類型を軸とすることで、この変容を明確に記述することを試みる。

このような「草創期のGLA」は、日本の高度経済成長期であった1970年頃の人々に何を与えていたのだろうか。この第二の疑問を解くため日本近・現代の主導精神を見田宗介や奥村隆の論考から考察する。奥村の「失敗する者の存在」という問題の指摘から、アーヴィング・ゴフマンの「失敗への受容の過程」を明かにした論文を参考として、「草創期のGLA」の神秘＝呪術的技法が野心を「加熱する装置」として、また「冷却する装置」として作動したことを説明したい。

こうした作業ののちに、会員のインタビュー調査に基づいて、「草創期のGLA」の組織化の様相を明らかにする。これにより、この宗教における「制度化」と「神秘＝呪術的实践」の配分を分析することができると思う。

## 2 先行研究の検討

「草創期のGLA」の先行研究には、沼田（1985, 1986a, 1986b, 1988）、島藺（1992, 2001）、弓山（1994）などがある。島藺進『ポストモダンの新宗教——現代日本の精神状況の底流』や沼田健哉『現代日本の新宗教——情報化社会における神々の再生』、「GLAにおける教祖とその周辺」は、それぞれ「草創期のGLA」の教祖の伝記、教説、行、組織を研究している（島藺 2001: 197-216; 沼田 1986a: 129, 1988: 90-126）。行の八正道について、島藺は「正業（正しい身体的行為）」と述べ（島藺 2001: 202）、沼田は、「神理に適った「八正道」の実践」（沼田 1988: 109）と記しているが、信次が伝えようとした意図は説明されていない。

また、組織化について、島藺の教団類型論<sup>1)</sup>は「草創期のGLA」を「個人参加型に近い」と述べている（島藺 1992: 31）。沼田によれば、信次は組織による拘束を嫌い、講師も職階ではなく、現在程の明確な組織もなかったという（沼田 1986a: 129, 1987: 87）。

しかしながら、これらの研究において、行や組織についての説明は不十分である。そのため、筆者は行の「八正道」を説明する教説において、信次が説いた独自の「八正道」の原典研究を行い、原典に沿って記してみよう。また、組織においてこれらの研究はその説明において信次の著書から記しているだけで、実際の当時の組織化の様子を知る会員から聞き取り調査を記していない。そのため、筆者は2010年3月10日（A.M. 10:30からP.M.12:00位まで）、2010年3月15日（A.M. 10:30からP.M.13:00位まで）にGLAのKターミ

ナルにおいて会員のAさん<sup>2)</sup>に「草創期のGLA」の組織化などについてインタビュー調査を行った。この際、筆者は研究者であることを伝え、今後、公式な媒体で発表する旨も伝えた。

### 3 「宗教法人 GLA」の概要

ここで、概要を記すことにしよう。GLAの前身は1968年につくられた個人とグループの集合体だったが、ここから1969年4月8日に浅草の八起ビルに創設された「神理の会」となった(高橋信次 1973b: 139)、沼田によれば、この会は「大宇宙神光会」へと改名し、初代教祖に高橋信次が就任した。1970年には「宗教法人ジー・エル・エー総合本部 (God Light Association)」となった。宗教法人成立は1973年(昭和48年)3月28日であり、信次が死去した1976年(昭和51年)におけるGLAの会員数は8761名(文化庁届出数)であった(沼田 1995: 156)。

2012年、「宗教法人 GLA」に改名した(文化庁編 2013: 157)。『GLA総合本部本館 竣工に寄せて』というパンフレットによれば、会員数は2012年3月31日現在3万7892人(物故者を含む)である。そして『ようこそ GLA——新しく入会されたあなたへ 第2版』によれば、また、組織は全国8本部95ターミナル、海外13箇所である(GLA総合本部出版局編 2006: 9)。「現代のGLA」の組織は、GLA総合本部と地方本部で構成されており、地方本部にはGLA北海道本部、GLA東北本部、GLA東京本部、GLA北陸本部、GLA中京本部、GLA近畿本部、GLA中国四国本部、GLA九州本部である。ターミナル(住まいや職場に近い学びの場。会員の発意で運営)が95箇所ある。海外のターミナル(総合本部所属)はアメリカのロサンゼルス、サンフランシスコ、ニューヨーク、ハワイであり、ブラジルのサンパウロである。

その他、和歌山会館、京都会館、宮城研修センター、大宰府研修センター、岡山研修センター、

トータルライフ東京会館などがある。また、各種のセミナーの合宿所は八ヶ岳いのちの里大講堂、八ヶ岳いのちの里人生祈念館、八ヶ岳研修センター講堂で行われる。(GLA総合本部出版局編 2006: 9)。

このような「現代のGLA」の原点となった、「草創期のGLA」はいかなるものだったのだろうか。まず、初代教祖・高橋信次の伝記を検討することから始めよう。

### 4 初代教祖・高橋信次の伝記

「私は1927年、浅間おろしのきびしい、寒冷地、信州佐久高原(長野県佐久市)に生まれた。家は貧しい農家で、私はその10兄妹の2男である」(高橋信次 1971b: 16)。

沼田により補足説明すれば、信次は10人兄妹の2男であり、男3人女7人の真中に生まれたという(沼田 1985: 65)。信次の母は無学ながら、貧しい生活の中で不断の努力をするよう、以下のように子供たちに教えたという。

「心まで貧しくなってはいけない。常に与えられた環境の中で努力し続けることが人間である」、「自分自身にきびしく、できることなら他人に慈悲を施せ。悪い心は持つな」、「雨滴によっても石に穴はあく。いつの日にかは」(高橋信次 1971b: 17)。

信次によれば、母は諺で殺生について「一寸の虫にも五分の魂」と戒め、人の悪口をいえば、「人を呪わば穴二つ」などと教えたという(高橋信次 1971b: 17)。信次は著作で母の教えを詳細に記しており、母から大きな影響を受けたのであろう。

また、信次によれば、小学校6年生の担任の田中憲雄先生が「努力、天才をしのぐ」、「為せば成る 為せねば成らぬ 何事も 成さぬは人のなさぬなりけり」と黒板にかきつけて教えてくれた教訓も人生の内心の転換を与えてくれたという(高橋信次 1973b: 23)。信次は笠原一男(歴史家)と

の対談にさいしても、この先生の言葉を笠原に語っている（笠原 1975: 309）。このように、信次は母や先生から「努力」が大切だと教えられたのだろう。

信次は軍人志望であり、小学校を卒業し中学校に入ったが講義録で勉強し、希望の学校へ入学し、集団生活を送った（高橋信次 1973b: 23）。沼田によれば、軍人志願の信次は平賀小学校を終え、野沢中学2年の途中で陸軍幼年学校へ入学し、航空兵となり、各地を転戦した。その後にも大きな影響を与えたのは剣道であり、気・剣・体の一致であったという。信次は戦争についてあまり多く語らないが、現実には体内には弾丸の破片があったという（沼田 1985: 66）。

このように、信次は戦前・戦中のエリートといわれた職業軍人の夢をもった少年であり、14歳でそこに社会的成功の道を見出した（戦後、反戦を唱えることになったのだが）（高橋信次 1973b: 21-23）。ここには、のちに見るように、軍隊時代の部下とともに起業するような、近代日本の立身出世のアンビションをもって生きる青年の姿が見いだせるだろう。

## 5 信次のカリスマに魅せられた人々による教団形成

1968年、信次に「悟り」と言われる異言現象が起きる。この「異言現象」は「霊道を開く」実験であり、神の子の自覚により、超能力がつくことであるという。信次によれば、これらの現象はキリスト教の新訳聖書『使徒行伝』の第2章<sup>3)</sup>の現象であり（高橋信次 1971b: 204）、仏教の教典の『華嚴経十地品』<sup>4)</sup>の現象であるという（高橋信次 1971b: 208）。これを具体的に説明すると、1968年7月6日、信次が心を調和させ、「光を入れる」と義弟が古代の言葉を話すという異言現象が起きた。また9月19日、妹の星洋子が心を調和させ、信次が「光を入れる」と、観世音菩薩が入り、彼女は輪廻転生の過去世として紀元前

7000年頃のアトランテス帝国<sup>5)</sup>のフォロリアーという女性になり、語り出す現象が起きた（高橋信次 1971b: 48）。

信次はこれらの異言現象により、肉体は人生航路の乗り船であって「意識=魂」は自分の輪廻転生の記憶を潜在意識の中から蘇らせることができるのだという（高橋信次 1971b: 52）。1968年頃から様々なグループが集まり、互いに悟りあっていたが（高橋信次 1973b: 107-108）、1969年さらに人々が増え、指導霊などからの通信を聞いた。信次はこの運動を「精神復古運動」と名づけ、このグループを「アガシャ系のグループ」といった（高橋信次 1973b: 138-139）。

このように、「草創期のGLA」は、「個人が自由に神秘主義を探求」する「認識論的個人主義」<sup>6)</sup>であったといえるだろう。ロイ・ウォリスによれば、正統な教義をもたない「ニューエイジ」現象であり、個人が判断の権威になっている。

初代教祖・高橋信次の意識（大宇宙神霊・仏）は、会員らにエル・ランティーといわれている。それは、釈迦とイエスとモーゼを包括し、さらに上である巨大な光の意識の存在であるという（沼田 1995: 154-155）。「草創期のGLA」の神秘=呪術的技法としては悪霊払い（上之郷 1987: 120-121）や物質化現象（金粉現象）が挙げられ、それらは会員の間では珍しいものではなかったという（園頭 1994a: 184; 沼田 1988: 113; 村上 1985: 202）。

たとえば、「草創期のGLA」の元会員・観音寺住職村上宥快が静岡県藤枝の研修会から出流山の研修会へ行くうちに起きた、信次の物質化現象について次のように記している（村上 1985: 201）。

「講演中まさに獅子吼されておられる時に口より金粉が飛び散ったり、汗が乾くとその汗が金に変わってくるのである、この事実は多くの人びとの髪の中や着物や洋服に付着したことで証明されている」（村上 1985: 202）。

元会員の園頭によれば、1973年、長野県志賀高原竜王で、信次は弟子の中から9人を選び、インドの釈迦当時と同じ修行をしたという。園頭が

その様子をこう記している。「信次先生の上にある大きな光、その光の前に私は人の手で頭を押し付けられたわけではなかったけれども、頭をぐっと押さえられたようになり、心の中で「これが霊の威厳だな」（中略）。私はその感激に、有難さに泣けて泣けて仕方がなかった」。しばらくすると、信次が「園頭さん、わかりましたか」といったという（園頭 1994b: 100）。

このように、弟子になった人々は信次のカリスマの力、「カリスマの非日常」的な並外れた生来の力＝天与の賜物を崇拜したといえる。マックス・ヴェーバーが論じたように、GLA教団の成り立ちにおいては、人々は宗教的達人信次のカリスマや呪術や予言に魅せられて、教団を形成するようになったのだろう（Weber 1956b=1970: 70）。「草創期のGLA」は、信次の神秘体験を契機に69年の日本の高度成長期に人びとに支持され、創立された。この特徴は神秘＝呪術的技法であるが、会員たちの中には「霊道を開く」実験から、異言を語る神秘体験を得た者もいたという（高橋信次 1971a: 17）。

ヴェーバーの類型によれば、このような「神秘体験」において、会員らは神的なものの「容器」であるといえ（Weber 1920-1921=1972: 103-104）、「神」が宿っているといえよう。そして、ヴェーバーが論じるように、現世における行為は、まったく非合理的な現世の外における救済の状態を危うくするものとして生じる。このように、神秘論は現世逃避を徹底化させてゆく（現世逃避的瞑想 *weltflichtige Kontemplation*）（Weber 1920-1921=1972: 104）。

「草創期のGLA」における「霊道を開く」神秘体験においては、「神の容器」である会員にとって、現世の行為は救済へ至る道といえないのである。

では、「草創期のGLA」における教説と行と現世の行為についての考え方はいかなるものだったのだろうか。これを次に考察することにしよう。

## 6 「草創期のGLA」の教説と行—— 「神の容器」から「神の道具」へ

信次が聖典<sup>7)</sup>を書くことにいたった契機は、守護霊により「神理の記録を完了するようにいわれた」ことだったという（高橋信次 1973b: 89）。信次の「教説」の骨格は、「宇宙・（地球）・人間」は輪廻転生しながら調和していることにある。「あらゆる生けるものの心」＝「神・仏の慈悲と愛の心」であり、それゆえ「調和」とは「宇宙・（地球）・人間」の意識（心）が相互に通じ合っている「悟りの世界」である。「宇宙・（地球）・人間」は輪廻転生という進化の道を歩みながら、調和しているが、人間のこの現世に生まれた使命は、守護・指導霊の助力を得て、過去世・現世・来世の三世の生命流転の過程において、神の御心に沿った仏国土・ユートピアを創る使命をもつことであり、このことを悟れという（高橋信次 1973a: 338）。

また、信次は夜寝る時に、床の上で静かに朗読し、その日一日の想念行為を「反省」し、過失（あやまち）を正し、中道の心に一日も早く修正されることを望む、という（高橋信次 1973a: 349）。

このように信次によれば、会員の行は「反省」することであり、カルマを修正することであった。また、信次は生老病死の解決に「八正道」（仏教の八正道とは異なる内容である）を挙げる。これは以下の8つからなる。①正見（ものを正しく見ることである）。②正語（よく自分の心に問い、自分が相手の心になって語り合うことが大切なのである）。③正思（正しい自分の心に忠実な考えをもつことである）。④正業（仕事が「天職」であるという。この「正業」については後に詳細に記す）。⑤正命（正しく見る心の修行をする。調和の心で物事を判断する）。⑥正進（正しい生活に励む）。⑦正念（人間の心の中で念じることは即現象化されるのであるから、自分が欲望を果たそうとして、念じる心は欲望のとりこになり、自

分の意識に記録されてしまうという。しかし、この不調和な念も反省することによって、心は進歩するという。⑧正定（心の調和を計り、反省の瞑想は、己の霊域（オーラー）を造り出し、己の心の神性、仏性が潜在意識の扉を開き、不滅の世界、あの世を思いだすことができるのである。意識はあの世の实在界やこの世の現象界のどこにも行けるといふ）（高橋信次 1971b: 172-191）。

島蘭も沼田もGLAの「八正道」の「正業」について信次による詳細な説明をとりあげていない（島蘭 2001: 202; 沼田 1988: 109）。これをここで説明しよう。信次によれば、この現象界におけるの修行は物質・経済の場である（高橋信次 1971b: 176）。そして、与えられた仕事こそ「天職」であり、この仕事により生命の保存をしているのだから、努力して成果をあげなくてはならない（高橋信次 1971b: 177）。事業体の責任者は自我我欲を捨て、従業員を幸福にすることを目的とし、労使協調の心を果たすことが必要である（なお、信次自身は1950年に事業を始めて、398件の発明品・特許品をもっている実業家である）（高橋信次 1971b: 178）。

より具体的に信次の言葉を見てみよう。まず、「新製品の開発にしても心が悟った行いの中から、その研究努力に対し、より以上の靈感が与えられるというものである」と述べている（高橋信次 1971b: 178）。労使協調の精神については、「現代社会における労使の闘争は、不自然である。資本家も労働者も、物質的、経済的な考えのみで、人間として、神の子としての尊厳を失っている」（高橋信次 1971b: 178）と述べる。

信次は、資本家の感謝の表現は労働力に対して生活の安定を保障することであると述べ、後に次のように語る。「また労働力の提供者は、「正しい仕事」の提供者に対して報恩感謝の印として、仕事に専念し、己に足ることを知った生活の基盤を築かなくてはならない。労使協調の精神は、闘争を根底にした協調であってはならないのである」。「働いた金を当然のごとくもぎとろうとする

心、行為は、すでに「正しい仕事」とはいえない。賃上げ交渉にしても、本来相互理解を根本とすべきである。相互の心からの話合いが正しい神理なのである」（高橋信次 1971b: 179）。信次によれば、労使の争議の解決について、常に労使の心を調和させ、より「向上するための努力」の結果には、神仏の光がもたらされ、「正しい仕事」ができるのである（高橋信次 1971b: 181）。信次は経営者側に対し、利益は働く人々に還元し、常に心の対話によって高い業績を挙げ、余った「利潤の一部は社会福祉の方向へも還元すれば、経営者達の菩提心は磨かれて行く」といふ（高橋信次 1971b: 181）。

このような信次の教説こそ、後期資本主義の時代にGLAという宗教教団が発展した意味を示しているのではないだろうか。島蘭によれば、GLAにおける实在界（あの世）において人間は永遠の生をもって輪廻する魂であると説いているため、实在界は現象界よりも实在性があるかのようにみえるという（島蘭 2001: 76）。しかし、筆者は島蘭の見解と異なり、信次はその教説で現象界におけるの修行は物質・経済の場であると述べている（高橋信次 1971b: 176）。この会員の行の「八正道」の正業の内容により、GLAは現世の生に高い価値を置いていると主張したい。

1968年頃から様々なグループの集合体が「個人の自由な神秘主義の探求」をすることにより始まった「草創期のGLA」であるが、1971年、『心の発見』（3部作）の教説において、信次は「現世の道徳」を説くように変容してきたといえよう。この教説において信次は、「神」が示した「天職」という「正しい仕事」をするように説いている。このことは、ヴェーバーがカルヴィニズムにおいて示したように「神の意志」を実現させることであり、信次は会員に「神の道具」（隠されている神の意図を実現する）となるように説き、「現世的禁欲」の態度を要求していると考えられる。

また、信次は神秘家に対しても瞑想的な神秘家が世俗的禁欲に留まる現世的な神秘論

innerweltliche Mystik)の態度を要求しているといえるだろう(Weber 1920-21=1972: 104)。

信次によれば、人類はこの地上へ他の天体から天孫降臨したが、しかし、人類は次第に欲望のとりこになった。生まれた時に「神の子」であることを忘れてしまっているという(高橋信次 1973b: 160)。そのために人間は「八正道」を行い、自分の生活を「反省」し、今日はどれだけの仕事をしたのだろうか、その仕事は人類に貢献できる「正しい仕事」であったらうかと自分が審査するように教えているのである。この態度は、神秘主義の「神の容器」とは対照的な態度であろう。

物質文明の中で「神の子」としての自分を忘れてしまっている人間は、この世界で「価値」を失っている。その人間が絶対的な「神」の「神の子」としての自覚を生むために「禁欲」し、「正しい仕事」をすることにより、人々は神に近くなる、と信次は考えたのだろう。

このように、信次の教説を見るならば、「草創期のGLA」において、神と人間の関係が神秘主義という「神の容器」から、「神の意志」を実現させる「神の道具」へと転換されているのがわかる(Weber 1920-21=1972: 106)。「神理の会」において信次は神秘=呪術的技法の表現により、呪術的カリスマの所有によって自己の正統性を主張したが、「草創期のGLA」においてその教説を形成することで、現世の生活も組織的な生活様式まで作り上げ、禁欲と神秘論双方の萌芽を形づくったといえるのではないだろうか。

## 7 近代「立身出身主義」と神秘=呪術的技法

こうした「草創期のGLA」の神秘=呪術的技法は、人々に何をもたらしたのだろうか。ここで、その時代背景・思想背景として、競争社会、あるいは「立身出世主義」と神秘=呪術的技法の関係について、考察することにしよう。

GLAの前身は、1968年にアメリカの「ニュー

エイジ」運動から影響を受け、宗教的達人のカリスマ・信次の神秘=呪術的技法やチャネリングを中心に、外国語の宗教文献を読む人々によって形成されたという(高橋信次 1973b: 88)。島藺によれば、日本の70年代以降の宗教ブームをデータから検証すると、「教団宗教ざらい」ではあるが、「呪術=宗教的行動」を行う傾向があり、80年代になるとこの傾向はより高い数値を示している(島藺 2001: 175-176)。そして、新新宗教ブームと言われるものを担った新しい傾向はこの「呪術=宗教的行動」を行う傾向であろう。1969年という高度成長期に創立された「草創期のGLA」の特徴は「霊道を開く」実験や異言を語り出すという神秘体験であったことはすでにみたとおりである(高橋信次 1971a: 17)。信次はこの現象はキリスト教のイエスと使徒におきた現象が2000年後に起きているものとし、自分と弟子をイエスと使徒であると語って、この現象を起こす方法を伝えている(高橋信次 1971a: 15)。

では、日本の高度経済成長期において、この信次のカリスマが、教団の主要な担い手であった経済評論家や企業経営者たちに何を与えたのだろうか。ここで、日本近代を主導した精神について、遡って考察を加えたい。

見田宗介によれば、明治以来の「近代化」過程において、その内面的・主体的な推進力を用意したのは「立身出世主義」であるという。見田は日本近代は、身を立て名を挙げ、と上昇移動を鼓舞する社会であり(見田 1971: 185)、このような「立身出世主義」の精神が人々の受験戦争や職場における上昇移動への欲望を加熱したといえよう。しかし、人々がこれにより、社会上昇の野心を加熱させられたとしても明治時代にあっても入試難があるなど(見田 1971: 188)、試験による選抜が存在しており、すべての野心が満たされているわけではない。

奥村隆が近代以前と近代を比較して、前者が人を「生まれ」=「～である」から価値があるとする「属性主義(ascription)」の社会で

あるのに対して、後者は生まれではなく、「能力が高い者、業績をあげた者を評価する「業績主義 (achievement)」、あるいは「能力主義 (meritocracy)」を原則とする、という (奥村 1997: 308-309)。能力主義」は、「できる」「できない」ということにより人を序列化する社会である。「できない」人は価値がない、今できても次に努力してもできなければ価値がないという「不安」を抱えているという (奥村 1997: 310)。

デイヴィット・リースマンがいうように、日本の高度成長期の「他人指向型」<sup>8)</sup>の人間は、同時代の仲間集団という微小な差異を競う合う銀河の中にいるともいえるだろう。ここで彼らは、仲間集団やマス・メディアの合図に煽られながら、反応するレーダー装置を作動させ、仲間すら序列化するという「不安」をもっているという (Riesman 1961=1964: 21-22)。

奥村がいう「努力」してもできなければ価値がないという「不安」(奥村 1997: 310)、リースマンのいう仲間を序列化する競争社会や情報化社会による「不安」の背景には、選抜というものが横たわっている。奥村は、このような「加熱」による社会、「できる原理」で成立する社会において、「失敗」する人々の存在が重要な問題であることを指摘している (奥村 1997: 316)。

ここで、「失敗」という現象について、その受容の過程として「冷却」を論じているアーヴィング・ゴフマンの信用詐欺師についての考察を参照しよう。ゴフマンによれば、信用詐欺に騙されたカモは騙されたことによって自尊心が傷つく。一方、詐欺師の方もそれをそのままにしておけば悪い評判を立てられることを恐れるため、詐欺師の仲間をカモの傍につけて怒りを鎮静化させ、この失敗を受容できるように誘導する。この誘導する役目をするものをゴフマンは「冷却者 (cooler)」と呼び、失敗を受容する過程を「冷却化」という (Goffman 1952: 451-463)。クーラーは、カモの怒りや失墜の深い悲しみの感情を和らげ、失敗を受容できるように誘導するのだ。

日本の「立身出世主義」に煽られた人々の多くは、仲間を序列化し、人を選抜する社会において、努力しても報われない者となる。このような社会において、「草創期のGLA」の担い手であった経済評論家たちや企業経営者たちは「立身出世主義」において加熱され、日本社会の中で上昇移動を遂げてきたといえるだろう。その彼らと神秘=呪術的技法はどのような関係をもっているのだろうか。

GLAの特徴である神秘=呪術技法は、会員たちに「霊道を開く」実験をさせ、異言を語らせる (高橋信次 1971b: 17)。これらの会員らは神秘的なものの「容器」となり、(Weber 1920-1921=1972: 103-104)、「神」が宿る。しかし、この神秘論において現世における行為は、現世の外側における救済の状態を危うくし、現世逃避をさせるものである (Weber 1920-1921=1972: 104)。

ピーター・バーガーも、ヴェーバーと同じように神秘体験は体験者にとって夢心地であるため、現世を色褪せた日常にしてしまうという (Berger 1979=1987: 64)。バーガーやヴェーバーによれば、神秘主義はこの「現世」から人々を逃避させ、「現世」を色褪せたものにする。このことは、仲間を序列化する社会、選抜する社会、自分を価値がないと位置づける社会を逃避することであり、相対化することである。このように信次の神秘=呪術的技法の神秘世界は人々に「異世界」を示すことにより、選抜する社会を相対化し、色褪せたものにするために激しい競争で「不安」に高ぶる感情を「冷却」するのである。

しかし、同時にカリスマ信次の神秘=呪術的技法により、「草創期のGLA」の会員たちは「霊道を開く」という神秘体験によって神秘力を得たと考え、野心を「加熱」させ、後期資本主義時代の国際競争の中で業績を上げるために邁進してゆく。このような時代に信次は教説において「八正道」の正業を説く。正業によれば、この現象界における修行の場は物質・経済の場である (高橋信次 1971b: 176)。そして、与えられた仕事こそ「天

職」であり、この仕事により生命の保存をしているのだから、努力して成果をあげなくてはならないと諭す（高橋信次 1971b: 177）。

信次が説く教説の「正業」は上記のように宗教的な観念と経済的日常生活を関連させたものであり、この「正業」において、信次は、「神」が示した「天職」という「正しい仕事」に努力して成果をあげるように厳しく戒めている。そして、以下のようにも説いていた。

「資本家も労働者も、物質的、経済的な考えのみで、人間として、神の子としての尊厳を失っている」（高橋信次 1971b: 178）。

信次は物質文明の中で「神の子」としての自分を忘れてしまっている人間に対し、その人間が絶対的な「神」の「神の子」としての自覚を生むために「禁欲」し、「正しい仕事」（天職）に努力して成果をあげるにより、人々は神に近くなると考えたのだろう。このように「草創期のGLA」の教説は仕事への野心を「加熱する装置」であろう。

そして、高度経済成長期において、カリスマ信次の神秘＝呪術的技法が会員に与えるものは神秘世界という「異世界」の提示であり、この提示により、会員は競争社会の現実を相対化する。同時に信次の教説は、「現世の道德」を説き、資本家の感謝の表現は労働力に対して生活の安定を保障することであると諭し、また労働力の提供者は、「正しい仕事」の提供者に対して報恩感謝の印として、仕事に専念し、己に足ることを知った生活の基盤を築かなくてはならないと教えた。信次によれば、労使協調の精神は、闘争を根底にした協調であってはならないのであると説いた。

「働いた金を当然のごとくもぎとろうとする心、行為は、すでに「正しい仕事」とはいえない。賃上げ交渉にしても、本来相互理解を根本とすべきである。相互の心からの話し合いが正しい神理なのである」（高橋信次 1971b: 179）。

信次によれば、労使の争議の解決について、常に労使の心を調和させ、より「向上するための

努力」の結果には、神仏の光がもたらされ、「正しい仕事」ができるのである（高橋信次 1971b: 181）。信次は経営者側に対し、利益は働く人々に還元し、常に心の対話によって高い業績を挙げ、余った「利潤の一部は社会福祉の方向へも還元すれば、経営者達の菩提心は磨かれて行く」と述べた（高橋信次 1971b: 181）。このような「草創期のGLA」の教説は現世の成功に高ぶる心を鎮めるための「冷却する装置」であろう。

以上のように「草創期のGLA」は現実の競争に焦る心に対する「冷却する装置」を備え、同時に野心を「加熱する装置」を備えているといえよう。

## 8 会員から聞く「草創期のGLA」の組織化

このふたつの側面をもつ「草創期のGLA」について、会員へのインタビュー調査に基づいて組織化を論じることで、以上の議論を補強してみよう。

島菌によれば、「草創期のGLA」は「個人参加型に近い」という（島菌 1992: 31）。信次は当初より講演会などの集会和単行本によって教えを広めたのであり（島菌 2001: 199）、島菌は「草創期のGLA」を組織化されていない「個人参加型」の特徴をもつと考えた。

また、沼田は当時のGLAの組織について以下のように述べている。

「信次が教祖であった頃には、教団の組織的整備は十分にはなされていなかった。GLA自体が当初から信次の教えを聞くために自発的に集まった人びとによって形成されたものであったし、組織を作っていくことに慣れていない人がほとんどであったためでもある。さらに信次は、当初からGLAの組織形態について、その在り方を示したわけではなく、会員の自発的な組織づくりに任されていたといってもよい状況であった。これは信次が組織による拘束を嫌い、よく『本当の自己の確立をなしている人が10人いればね』と言って

いたことに対応している。そのためもあって、講師も職階ではなく、組織も現在以上に明確に形成されていなかった。信次は宗教を職業とするべきではないと主張し、人間はそれぞれの職業のなかにエゴを取るよう努力するべきであると説いていた」(沼田 1995: 156)。

このような「草創期のGLA」の組織化について性格づけはどこまで妥当なのだろうか。

筆者は2010年3月15日(A.M.10:30からP.M.13:00位まで)Kターミナルにおいて、Aさんという会員(1971年に入会)へインタビュー調査を行った。そこでは入信の理由、霊的現象についての考えを尋ねるとともに、「草創期のGLA」の組織化について質問した。以下、これを短く紹介し、考察したい。

Aさんは、前回のインタビュー調査のさい、「現代のGLA」の集いの初めに行う聖典『新/祈りのみち——至高の対話のために』(2006)の「集いのための祈り」の箇所を朗読した。——中略——。筆者がAさんに信次の印象を尋ねたところ、「威厳があった」という。Aさんが会員となるきっかけは、信次に子供の重度の脳性小児麻痺について相談したことであった。

Aさんが考える悪霊は、自分の心が悪霊であることであり、2009年から始まった「供養」においても自分の思ったことが現象化している、という。つまり、自分の心が怒りで霊道を開けばそのようなもの(悪いもの)になり、人間が安定しない、という。そして、現代の教団が「霊道を開く」などの超能力開発を教団として統制していることに対して、思ったことがそのまま出るので、怒りをもった心で行うことは精神の不安定につながる例があり、今(「現代のGLA」)の会員は「霊道を開く」実験や霊的現象の探求を今はしていない)はしていないという。

Aさんは71年に信次を知り、72年にO支部(現在はKターミナルである。この支部は品川、大森も含むようになり、後に横浜も入れていたこともあった)に入会した。その頃、すでにO支部

は150人くらいの会員がいた。他には、中央支部、台東支部、後に渋谷支部ができた。すでに、支部長や副支部長が会員を指導していた。その頃、信次は身体が弱いうえ、仕事に忙しいので、会員たちはテーブルで教祖の話を聞いていたという。この時代、教祖の講演会は年数回であった。また地区座などもしたという。

Aさんによれば、この頃、GLAで流行していたのは、誰の生まれ変わりということや、前世の霊の話であった。Aさんはそれをつまみ、「永遠の生命の魂の進化のことである」という。また、Aさんによれば、信次はたびたび、「自己の確立」「魂の調和」が人生のテーマであるといったという。

現在のトータル・ライフ経営(以後、TLと記す。TL経営を実戦する専門家の研究会)は、はじめ経営者の勉強会であった。そこには、洋服屋のMやT建設の重役や雑誌『経済界』の佐藤正忠や久水宏之講師などがすでにいた。佐藤は雑誌『経済界』主幹の経済評論家であり、佐藤は企業集団「経済界」という年商100億円の団体を率いており、信次の説くGLAの「八正道」を絶賛し、自らの著作で人々へ薦めている。また、久水は東京大学卒の元日本興業銀行常務取締役業務部長、元大蔵省の金融問題研究会委員である経済評論家だった。しかし、今と異なり、その頃にはTL経済に入会する要件はなく、これらの会は、信次と久水講師を中心として活動していたという。谷口健彦講師(GLA東京本部長、東京大学工学部卒)も活動に加わっていた。

このAさんへのインタビュー調査からは、「草創期のGLA」は1972年頃、すでに「中間型新宗教」へ移行し、組織化されていたことがわかる。島藪は「個人参加型に近い」と述べ(島藪 1992: 31)、沼田は信次が教祖だった頃は教団の組織的整備は十分ではなかった(沼田 1995: 156)と述べていたが、Aさんの話からは、日常は支部で活動し、信次の講演会や合宿やTL経営や研修会などがあり、すでに組織化されていたと考えられる。

そしてこの組織化の担い手は経済評論家や企業経営者であった。

ヴェーバーによれば、カリスマによる支配は不安定なものであるから、安定したもの、永続的なものに変えようとする方向へ向かってゆく(Weber 1920-1921=1970: 55)。それは「制度的なもの」であるといえよう。

信次は予言の死を迎える2年前の1974年頃から、教団の組織化をすすめて、「神秘主義や呪術」の表現も教祖と一部の教団役職者に限定するなど(沼田 1986a: 127-128; 園頭 1994: 174-175)の方策をとった。これはウォリスのいう「認識論的権威主義」と呼べるだろう(Wallis 1977: 14)。

このようにAさんからのインタビュー調査により、「草創期のGLA」は組織化されていたことが明らかなのである。

## 9 結びにかえて

### 一「草創期のGLA」の制度化・教説形成と神秘＝呪術的実践の弱まり一

このように「草創期のGLA」は、「神秘＝呪術的实践」(「神の容器」的性格)と制度化・教説形成(「神の道具」的性格)を同時に備えたものであった。これが「立身出世主義」に主導された高度成長期の日本社会に受容された、というのが本稿の主張であった。以下にこれを要約して、本稿の結びにかえることにする。

GLAの初代教祖・高橋信次は近代日本の「立身出世主義」に沿うように戦前のエリートといわれた陸軍幼年学校に入学し、戦後、部下とともに起業し、自宅で人々の悩み相談を受けていた。信次は「霊道を開く」というシンクレッティックな異言現象の「悟り」を起こす。人々は信次のカリスマに魅せられて、個人とグループの集合体を形成するが、そこにはリーダーもなく、「個人が自由に神秘主義を探究」する「認識論的個人主義」の性格が強かった。しかし、人数が増えてゆくなか

で、信次を教祖として制度化された「大宇宙神光会」が形成される。信次の神秘＝呪術的技法により、人々は「霊道を開く」実験の神秘体験をし、教団を形成したのである(Weber 1956b=1970: 70)。「草創期のGLA」における神と人間の関係は、会員らが「神の容器」というものだったといえよう(Weber 1920-21=1972: 103-104)。

1971年、『心の発見』(3部作)において信次は、行は「反省」と「GLAの独自の八正道」である説き、正業において信次は労使協調による「正しい仕事」をすることを説いた。島薺の「現世離脱的傾向」という見解とは異なり、「草創期のGLA」の教説は現世を修業の場として重視していた。さらに信次の教説は、「神」が示した「天職」という「正しい仕事」をすることであり、それはヴェーバーがカルヴィニズムに示したように会員に「神の意志」を実現させるために人間が「神の道具」となることを説き、「現世内的禁欲」の態度を要求している(Weber 1920-21=1972: 104)。「神理の会」、「草創期のGLA」における信次は呪術的カリスマの所有によって自己の正統性を主張したが、後に信次は教説を形成し、現世の生活も組織的な生活様式まで作り、禁欲と神秘論双方を形作ることになった。

この背景には、近代日本の主導精神である「立身出世主義」があり、「能力主義」がある。このような「加熱」の社会、「できる原理」で成立する社会において、選抜で「失敗」する人々が存在する。ゴフマンが考察した失敗を受容する過程＝「冷却化」を参考に信次の神秘＝呪術的技法を検討するとき、この技法が神秘世界を示すことにより、選抜する社会を相対化し、色褪せたものにするこで、激しい競争で不安に高ぶる感情が「冷却」されることが理解できる。このように神秘＝呪術的技法は「冷却する装置」であり、同時にこの技法により神秘力を得たと感じれば、この技法は野心を「加熱する装置」としても作動する。また、行の「八正道」を説明する教説も禁欲を説き、仕事の成功へ努力するように「加熱する装置」と

して作動し、また、成功に奢る心を「冷却する装置」として作動している。

筆者による会員のインタビュー調査によれば、「草創期のGLA」は教祖・本部（本部長）・支部（支部長）とヒエラルキーが確立し、教説などの研鑽も支部長と支部の会員により、進められた。この頃すでにTL経営（トータルライフ経営）が存在しており、久水講師を中心に経営者が経営の勉強をしていた。このように島蘭の「個人参加型新宗教」の見解（島蘭 1992: 31）や沼田の見解（沼田 1995: 156）と異なり、「草創期のGLA」は制度化された「中間型新宗教」といえるだろう。

そして、「草創期のGLA」において信次と会員が神秘＝呪術的实践を行うが制度化されるにつれて神秘＝呪術的实践は弱くなる。「草創期のGLA」は1974年頃、「個人の神秘主義の探求」について、一般会員に統制をかけ（GLA総合本部編 1974: 79）、「認識論的権威主義」へと変容しようとしていた。「草創期のGLA」において、「個人の自由な神秘主義の探求」の「認識論的個人主義」から、教祖や教団幹部に神秘＝呪術的技法の表現が限定されてゆくカリスマコントロールを行う「認識論的権威主義」への移行が「草創期のGLA」においてすでに生じていたのである。

ここで本稿を結んでゆこう。「草創期のGLA」は「神秘＝呪術的实践」（「神の容器」的性格）において始まったが、制度化と教説形成（「神の道具」的性格）もすぐに整えられていったといえよう。この2つの宗教の性格をもっていたため、「草創期のGLA」が日本近代の「立身出世主義」に導かれた高度成長期における経済評論家・企業経営者などの人々に受容されたのであろう。そして、「草創期のGLA」の教説や神秘＝呪術的技法が野心を「加熱する装置」として作動し、また、「冷却する装置」として作動したためでもあろう。

さらに、会員のインタビュー調査によれば、先行研究（島蘭 1992: 31; 沼田 1995: 156）と異なり、「草創期のGLA」は制度化されていて、神秘＝呪術的实践は弱くなっていることがわかった。

このように本稿において、「草創期のGLA」について、制度化、教説、神秘＝呪術的实践をめぐる宗教変容を明らかにした。

#### 〔註〕

- 1) 島蘭は日本の新新宗教を「信仰共同体の緊密性の度合」を基準として3つの類型に分類しているので、これを参照したい。「旧」新宗教と比べて「緊密な信仰共同体を志向する教団」がある。この場合、一般社会の人間関係と比較して異質な関係をつくり、外部に対して閉鎖的であるという。中核信徒の共同体と一般社会との間には隔りがあるという。これを「隔離型」という（島蘭 1992: 15-16）。

これに反し、緊密な信仰共同体の形成を推し進めない教団がある。信仰者を信仰共同体によって束縛しないで、信仰者である個々人の自由に任せるタイプの教団である。これを「個人参加型」という。信仰共同体の人間的結束が散漫になり、道徳や信仰の倫理によって日常を律する傾向が弱い「個人参加型新宗教」の例はESP研究所、コスモメイト（自主性の尊重）などである。これらの信仰共同体の特徴はサークル感覚の「個人参加型」であるという（島蘭 1992: 17）。

幸福の科学は「個人参加型新宗教」であったが90年から91年に熱心な信徒をつくる方向の「中間型」へと次第に転換した。（島蘭 1992: 17）。

このような「中間型」はこの「隔離型」と「個人参加型」という2つの型の中間であり、「旧」新宗教に近いものと言われている。島蘭は「中間型」の例として、真如苑や宗教真光を挙げている。「中間型」の教団は信徒による信仰共同体が存在しながらも、その共同体は世俗社会と連続的であり、世俗社会と同じ地平に在るものとして認識されており、世俗社会を改善するところへ救いが感じられるので、個々の救いの延長に理想社会をみるというのである（島蘭 1992: 16-17）。

- 2) 2010年3月10日、3月15日にGLAのKターミナルで会員のAさんにインタビュー調査を行った。A

さんは50代になり、GLAの会員の葬儀などを仕切る役割をしたという。後に、GLA八ヶ岳のちの里の墓地開発に係ったが地元住民の反対により、墓地の造成に至らなかったという。会員はボランティアとして教団の活動に係るがこの時、教団（講師は別である）が交通費とホテル代という費用を支払うということであった。

- 3) 『使徒行伝』によれば「使徒」とはキリストとの関わりにおいて復活の主を見て、その顕現に出会ったキリスト証人のグループを意味するという。「使徒」は12使徒とパウロという意味であるという（大貫編 2002: 479）。
- 4) 『華嚴経』は大乗を代表する教典のひとつ。漢訳60巻本と80巻本教典のひとつである。漢訳では「大方広仏華嚴経」と称する（中村編 1962: 140）。
- 5) バーネット版プラトン全集の古代ギリシアの哲学者プラトンの『テイマイオス』（1966）『クリティアス』（1978）によればアトランティス大陸は楽園であり、人々は霊能力を所有していたが洪水により、滅亡したと伝えられている。
- 6) ロイ・ウォリスはカルトから、セクトへの移行を表すために、サイエントロジーを例にその特徴を「認識論的個人主義」から、「認識論的権威主義」への転換であると考えた（Wallis: 1997）。  
「認識論的権威主義」について、ウォリスが描いたサイエントロジーを事例とした現代宗教の変容から説明しよう。ウォリスはこの「カルト」の特徴を個人主義であると考え、理念型的な「カルト」はその境界線の曖昧な集合体であり、正統な教説において、何が排除されるべきか異端の教えなのかを判断する根拠をもたない。それゆえ、自己がこれらの判断の権威となるような個人主義であるため、それを「認識論的個人主義」と名付けている（Wallis 1977: 14）。  
ダイアナティックスという心理療法を説く「カルト」は「ニューエイジ」現象といえ、組織はさまざまなグループと個人の集合体であり、「認識論的個人主義」であった。しかし、そのため弱体化してゆくののでダイアナティックスという「カルト」

運動は組織を強化するため、ラファイエット・ロナルド・ハバートを中心とした宗教セクトに変容し、ハバートが中心となる組織づくりをし、ハバートが権威の源泉となる「認識論的権威主義」において、教団の組織や理論のヒエラルキーを形成していった（Wallis 1977: 14）。

- 7) 高橋信次の著作は『大自然の波動と生命』第十五興生社出版社、1969年、『天使の再来——現代にも生きている宇宙の神理』八起光書房 1972年、もある。しかし、これらの著書は聖典とされていない。聖典は『心行』GLA総合本部出版局、1997年（改訂）である（GLA総合本部出版局 2006: 33）。そして、「現代のGLA」は代表的な著作として『心の発見』（三部作）三宝出版、1971a年、1971b年、1973a年と『人間・釈迦①～④』三宝出版、1973b年、1974年、1976a年、1976b年を挙げている。
- 8) デイヴット・リースマンは20世紀の前半まで資本主義の推進力になってきた「内部指向型人間」から消費社会の進展と第二次大戦後のアメリカに出現した「他人指向型人間」を分類した。前者が輝く星に向かって歩む人間という（明確な未来や目標がある）ことに対し、後者は微細な差異を競い合っている銀河という状況の中を生きていること（価値の絶えざる相対化の状況）を指す。それは同世代やマスメディアの中で自分のレーダー装置を作動させ、軌道修正させ、不安の中で生きていることを示すという（Riesman 1960=1964）。

#### [参考文献]

- Berger, Peter L., 1979, *The Heretical Imperative: Contemporary Possibilities of Religious Affirmation*, New York: Anchor Press / Doubleday, Garden City. (=1987, 藪田稔・金井新二訳『異端の時代——現代における宗教の可能性』新曜社。)
- 文化庁編, 2013, 『宗教年鑑 平成24版』ぎょうせい。
- Burnet, J., *Platonis Opera*, 5 vols, Oxford Classical Texts. (=1975, 種山恭子・田之頭安彦訳『プラトン全集12——テイマイオス・クリティアス』岩波書店。)

- GLA 総合本部編, 1974, 『GLA. 1974.8』 三宝出版社.
- GLA 総合本部出版局編, 2006, 『ようこそGLA——新しく入会されたあなたへ第2版』 GLA 総合本部.
- GLA 東京本部編, 2009, 『Global Genesis Project——プロジェクト募集要項』.
- Goffman, Erving, 1952, *On Cooling The Mark Out: Some Aspects of Adaptation to Failure*, in *Psychiatry*, 15 (4) : 451-463.
- 芳賀学・弓山達也, 1994, 『祈る ふれあう 感じる——自分探しのオデッセー』 IPC.
- 上之郷利昭, 1987, 『教祖誕生』 新潮社.
- 笠原一男, 1975, 『現代人と仏教——親鸞・道元・新興宗教の七人の教祖たち』 評論社.
- 見田宗介, 1971, 『現代日本の心情と倫理』 筑摩書房.
- 村上宥快, 1985, 『調和への道——心の存在を自覚するために』 観音寺出版局.
- 中村元監修, 1962, 『新・仏教辞典』 誠信書房.
- 沼田健哉, 1985, 「高橋信次とGLAの研究」『桃山学院大学社会学論集』 第19巻(第2号) : 171-194.
- , 1986a, 「GLAにおける教祖とその周辺」『桃山学院大学社会学論集』 第20巻(第2号) : 113-131.
- , 1986b, 「カリスマの生と死——高橋信次とGLAの研究」『桃山学院大学社会学論集』 第20巻(第1号) : 1-33.
- , 1987, 「現代新宗教におけるカリスマ——高橋信次とGLAに関する考察」『教団とその周辺』 雄山閣出版.
- , 1988, 「現代新宗教(新新宗教)」『現代日本の新宗教——情報化社会における神々の再生』 創元社.
- , 1995, 「GLAの研究」『宗教と科学のネオパラダイム——新新宗教を中心として』 創元社.
- 奥村隆, 1997, 「文化装置論になにかできるか——人に努力させる仕組み」奥村隆編『社会学になにかできるか』 八千代出版.
- 大貫隆・名取四朗・宮本久雄・百瀬文見編, 2002, 『岩波キリスト教辞典』 岩波書店.
- Riesman, David, 1960, *The Lonely Crowd: A Study of the changing American character*, New Heaven: Yale University Press. (=1964, 加藤秀俊訳『孤独な群衆』 みすず書房.)
- 佐藤正忠, 1990, 『信仰は力なり』 経済界.
- 島藺進, 1992, 『新新宗教ブーム 岩波ブックレット NO.237』 岩波書店.
- , 2001, 『ポストモダンの新宗教——現代日本の精神状況の底流』 東京堂出.
- 園頭広周, 1994, 『正法と高橋信次師2』 正法出版.
- 高橋佳子, 2006, 『新/祈りのみち——至高の対話のために』 三宝出版.
- 高橋信次, 1971a, 『心の発見——科学篇』 三宝出版.
- , 1971b, 『心の発見——神理篇』 三宝出版.
- , 1973a, 『心の原点——失われた仏智の再発見』 三宝出版.
- , 1973b, 『心の発見——現証篇』 三宝出版.
- , 1975, 『悪霊——あなたの心も狙われている』 三宝出版.
- , 1976, 『心の対話』 三宝出版.
- Wallis, Roy, 1977, *The Road to Total Freedom: A Sociological Analysis of Scientology*, New York: Columbia University Press.
- Weber, Max, *Wirtschaft und Gesellschaft: Grundriss der verstehenden Soziologie*, Funfte, Revidierte Auflage, besorgt von Johannes Winckelmann (Studienagabe), 1972, Zweiter Teil, Kapitel V Religions Soziologie. (=1976, 武藤一雄訳『宗教社会学』 創文社.)
- , *Wirtschaft und Gesellschaft: Grundriss der verstehenden Soziologie*, vierte, neu herausgegebene Auflage, besorgt von Johannes Winckelmann 1956, erster Teil, Kapitel III, VI (S.122-180) (=1970, 世良晃志郎訳『支配の諸支配型』 創文社.)
- , *Gesammelte aufsatze zur Religionssoziologie*, 3 Bde., 1920-21. (=1972, 大塚久雄訳『宗教社会学論選』 みすず書房.)

